資料２０

（表紙）

（仮称）多摩市文化芸術将来ビジョン2035

令和５(2023)年

多摩市

1　はじめに

〇みんなの文化芸術条例を施行したこと
〇条例に基づき、計画的に文化芸術を振興していくため、計画を策定すること
〇その前段として、将来ビジョンを策定すること
〇将来ビジョンは、多摩市の文化芸術の将来像を明確にするもので、みんなと共有できるものとすること

（以下、文案）
令和４（2022）年４月に施行された「多摩市みんなの文化芸術条例」は、理念条例として、みんなで文化芸術を振興させていく目的で制定されました。条例に基づき、計画的に文化芸術を振興していくため、令和５・６年度の２ヵ年で（仮称）文化芸術振興計画（以下、計画）の策定に着手していきます。
（仮称）多摩市文化芸術将来ビジョン 2035 は、計画の前段として、多摩市の文化芸術の将来像を明確にするとともに、みんなで具体的なイメージを共有できるものとし、市民委員を中心とした検討委員会を立ち上げ、検討を進めてきました。策定にあたっては、検討委員会のほか、市民の皆さんの意見を広く取り入れるようワークショップやアンケートを行い、市民の皆さんが共感できるビジョンとしました。

2　文化芸術を取り巻く環境

〇社会情勢として、情報通信技術が発展する中、新型コロナ感染症の拡大を機に、インターネットを利用した映像配信が広がったこと
〇社会情勢として、人口減少社会に移行する一方で、人々のライフスタイルが多様化していること
〇多摩市の人口推移予測と文化芸術分野の課題について
〇市民・行政・企業等が一丸となり、これまで以上に創意工夫し、文化芸術を発展させていく必要性について

（以下、文案）
情報通信技術の発展が進む中、新型コロナウイルス感染症の拡大をきっかけに、文化芸術の場が人々の集まる劇場や会場等の固定の場所だけでなく、インターネットを利用し映像技術が向上したディスプレイで鑑賞する映像配信へと広がり、文化芸術の鑑賞方法の選択肢が増えました。
また、人口減少社会に推移する一方で、人々のライフスタイルの多様化しています。
多摩市は、今後４０年間で６５歳以上の老年人口は横ばいですが、６４歳以下の生産年

齢人口および年少人口は減少されると予想されています。市は税収減となり、財政は厳しくなる見通しであり、様々な多様な文化芸術の担い手をどう確保していくか等の課題があります。社会情勢や文化芸術を取り巻く環境が急激に変化する中、時代の変化をとらえ、市民・行政・企業等が一丸となり、これまで以上に創意工夫し、文化芸術を発展させていく必要があります。

3　文化芸術のもつ力

〇文化芸術条例の前文第２・３段落の引用
〇文化芸術を盛り上げていく必要性について

（以下、文案）
文化芸術は、私たちの心に潤いと安らぎをもたらしてくれるとともに、創造する力を育て、豊かな個性と自己肯定感を育む力を持っており、次代を担う子どもたちの成長に大きく寄与するものです。また、文化芸術に触れることで、感性を豊かにし、共感する心、そして他者を理解する力を養うことができます。さらに、文化芸術を通して、地域を越えて人々とのつながりを築いていくこともできます。
このように、文化芸術は、私たちの生活や子どもたちの成長になくてはならないもので、私たちの住む街の活力となるものです。（多摩市みんなの文化芸術条例前文より）
これらの通り、文化芸術は、人々をつなげる手段として機能し、相互理解を促す力をもち、生きていく上での必要な営みとして、人々の生きがいや心の拠り所となる力をもっています。
だからこそ、一人ひとりの考えを尊重し、みんなで文化芸術を盛り上げていくことが大切になります。

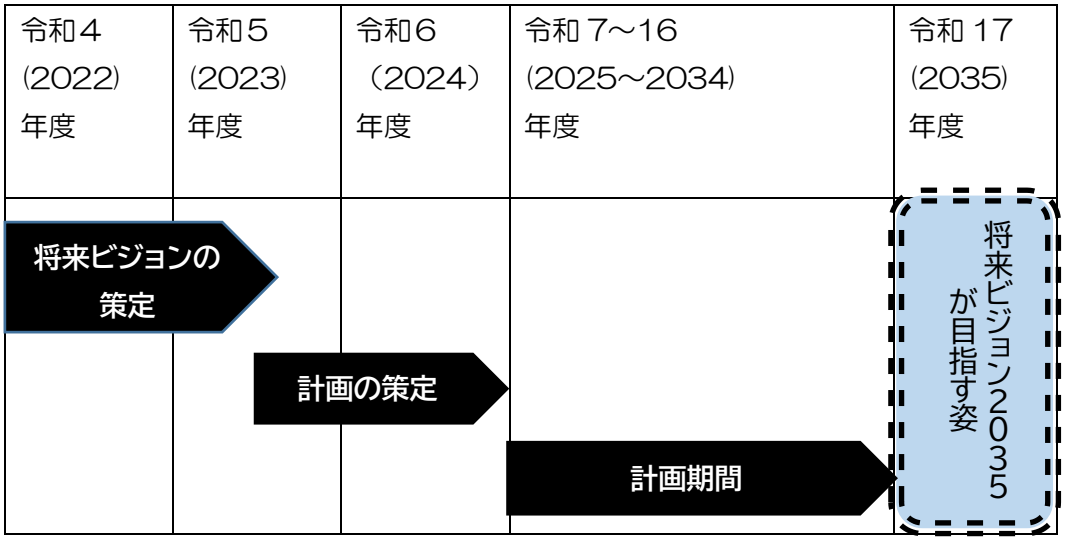
４　将来ビジョンと計画の関係性

将来ビジョンとは、将来のありたい姿や目指す姿を示すものであり、一方、計画はその将来ビジョンを実現するための具体的な施策や手段、手順を示すものとなります。よって、将来ビジョンは具体的な施策を策定するための大前提となります。

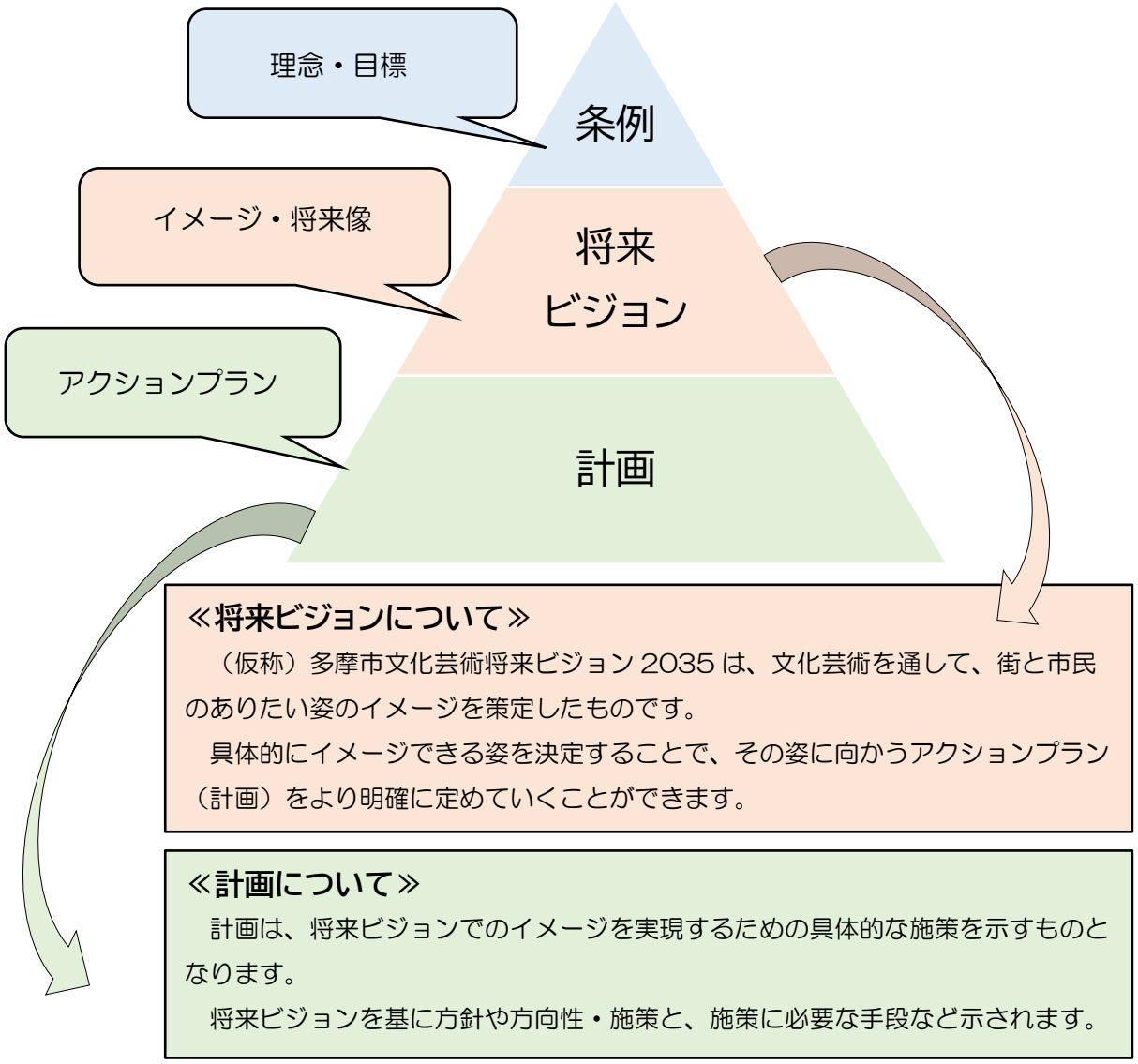
（仮称）多摩市文化芸術将来ビジョン２０３５は、令和１７年（2035 年）度の時点で、文化芸術を通した目指すべき街や市民の姿を表現するものとし、定性的（質的）側面をもつ将来ビジョンとして、「多摩市は文化芸術で１０年後にどのような街や市民であってほしいか（状態）」を定めています。

将来ビジョンを実現するため、令和５・６年度の２か年で、段階的に進める戦略的な施策やロードマップ（行動や手順）を「（仮称）多摩市文化芸術計画」で策定する予定です。なお、計画の期間は令和７年下半期からビジョンで設定した令和１７年までの１０年とする予定です。

(1) 将来ビジョン策定･計画等における期間



⑵将来ビジョンと計画の関係性のイメージ



5　将来ビジョンの対象となる文化芸術の範囲（文化芸術基本法より）

分野	内容
芸術	文学、音楽、美術、写真、演劇、舞踊など
メディア芸術	映画、アニメーション、電子機器等を利用した芸術など
伝統芸能・芸能	雅楽、能楽、文楽、歌舞伎、講談、落語、漫才、歌唱など
生活文化・国民娯楽	茶道、華道、書道、食文化、囲碁、将棋など
文化財	有形・無形文化財（建造物、絵画、彫刻など）
地域における文化芸術	地域固有の伝統芸能、郷土芸能（めかい、山王下粉屋踊りなど）

６（仮称）多摩市文化芸術将来ビジョン2035の目指すべき姿について

将来ビジョンの目指すべき姿の土台となる大事な視点

（１）誰もが文化芸術に触れる機会が増えている
（２）表現活動の担い手が育成・支援されている
（３）文化芸術の鑑賞者・享受者が増えている
（４）市民どうし、市民と行政が連携し、文化芸術の振興が図られている
（５）身近で日常的に文化芸術のある街となっている

将来ビジョンの目指すべき姿

気がついたら、身近で日常的に
多様な文化芸術に親しんでいる市民が増えている

【将来ビジョンの目指すべき姿の内容における
背景・決定した理由】

市では、文化芸術に関わる人たちを、「鑑賞者」「自ら文化芸術活動を行う人」「活動の実現を支える人」「継承や普及に取り組む人」としました。それらの人たちが増えていくためには、身近で日常的に多様な文化芸術を行われ、今まで触れたことのない分野を知る機会が増えることで、文化芸術に親しむ市民のすそ野が広がっていく状態が土台にあることが必要であると考え、上記を将来ビジョンの目指すべき姿として決定しました。

7 将来ビジョンの目指すべき姿の具体的なイメージについて

将来ビジョンの目指すべき姿
気がついたら、身近で日常的に
多様な文化芸術に親しんでいる市民が増えている

将来ビジョンは、2035 年において、文化芸術を通してありたい姿をイメージしたものです。その姿を、市民の姿からの視点（市民の状態）、街の姿からの視点（街の状態）で表現し、見える化することとしました。

そうすることで、みんなが、文化芸術を通して目指すゴール（目的地）を共有することができるようにしています。

⑴2035 年の市民の姿からの視点

親しんでいる

●気づいたら、日ごろから文化芸術に触れ、親しんでいる

【解説】
人々は、日常を過ごしているだけで、ふと気がつけば、日ごろから文化芸術に触れており、無意識のうちに親しんでいます。
多摩市の文化芸術は、趣味で活動している表現活動の担い手から一流のアーティストまで、様々な人々が多様な分野で表現活動を行っています。その活動に参加・体験したい人や鑑賞・享受したい人に、文化芸術活動の情報が届き、生活の一部として自然に触れ、文化芸術に親しんでいる人々の姿を意味しています。

楽しんでいる

●あらゆる表現活動を、身近でのびのびと行い、誰かが受け止めており、人々は活動することや鑑賞・享受することを楽しんでいる

【解説】
様々な表現活動の担い手が、屋内・屋外を問わず、のびのびと多様な分野で表現活動を行っており、その活動を受け止め楽しんでいる人々がいます。
文化芸術が身近にある日常を楽しんでいる人々の姿を意味しています。

乳幼児から触れている

●子ども達は、乳幼児から文化芸術に参加・体験しており、文化芸術に対する興味を深めており、保護者や地域の人々は、子ども達に文化芸術に触れさせることの大切を理解している

【解説】
　子ども達は、乳幼児期から文化芸術に親しみ、文化芸術がある生活が日常となっています。
　乳幼児期から文化芸術に触れることは、創造する力、豊かな個性と自己肯定感を育むことに繋がり、子ども達の成長になくてはならないものです。
　乳幼児期から親しみ、文化芸術を身近で日常的なことにする必要があり、その環境作りをみんなで行っていく姿を意味しています。

途切れることなく触れている

●ライフスタイルの変化があっても、途切れることなく文化芸術に触れている

【解説】
　人々は、生涯を通じて、文化芸術に触れることができています。
　「仕事が忙しい」「子育てで時間がない」など、ライフスタイルの変化があっても、文化芸術に触れる機会が減ることなく、乳幼児から大人まで、鑑賞したい時に鑑賞でき、参加したい時に参加でき、創造・表現したい時に創造・表現できる人々の姿を意味しています。

いきがい・喜びを感じている

●文化芸術を通して地域で交流が生まれ、一緒に活動すること、教え教えられることで、生涯を通じていきがい・喜びを感じている

【解説】
　人々は、文化芸術を通して繋がり合い、一緒に活動することでいきがいや喜びを感じています。
　自身が得意なことを、子ども達や知りたいと思う人々などに教える機会があり、教える側は生涯を通じていきがいを感じ、教えられる側は「新しいことができた」「楽しい」など喜びを感じることができ、そして教える側に成長していく循環が生まれている人々の姿を意味しています。

⑵2035 年の街の姿からの視点

触れる

●趣味として活動している人から本物のアーティストまでの表現活動が、いたるところで行われており、身近で多様なイベントやお祭りに触れられる街

【解説】
　趣味として文化芸術活動を行う人たちからプロのアーティストまでを含めた様々な表現活動の担い手が、屋内・屋外を問わず、多様な分野で表現活動を行う街になっています。
　市民の生活の一部として、自然にイベントやお祭りに触れることができる街を意味しています。

交流・つながり

●表現活動が、多様な機関・様々な分野と連携し活発に行われており、市民だけでなく域外の人々とも交流が生まれ、コミュニティが広がっている街

【解説】
　文化施設を中心に、文化芸術を通して教育機関・福祉分野・農業分野等と広く連携し表現活動が行われ、人と人との交流が生まれる街となっています。
　表現活動は市内で区切られるものではなく、市外の人々が活動に参画し、鑑賞者としても関わりをもちます。表現活動を行うことで、また、活動後に人々と余韻を楽しむ工夫を行っていくことで、市民同士、市民や域外の人々の交流が生まれ、団体等のつながりもでき、コミュニティが広がっていく街を意味しています。

出会う

●様々な体験を通して、生涯を通じて活動したいものに出会える機会や環境がある街

【解説】
　様々な体験ができ、生涯を通じて「今まで気づかなかったが、自分はこれがやりたかった」と思えることに出会える機会や環境がある街となっています。
　多様なジャンルの文化芸術が身近にあり、気軽に触れることができ、体験を促すための場がある街を意味しています。

市民の力

●人々の得意なことや、専門的な知識・技術を生かす機会があり、文化芸術が振興している街

【解説】

市民の得意なことや市民がもつ専門的な知識・技術をつなぎ、生かす機会があり、文化芸術に関わる人が増え、文化芸術が振興されている街となっています。

表現活動を行う際、表現活動を自ら行う人だけでなく、表現活動を多くの人に伝えるためのキャッチコピーの考案やポスター・チラシの作成、動画撮影、司会進行など様々な役割を持つ人のスキルが生かされる街を意味しています。

支援

●表現活動の担い手を、情報発信や場の提供、個人や団体がコーディネート的役割で支援している街

【解説】

個人や団体がコーディネーター的役割となって支援している街となっています。

表現の担い手と場や市民をつなぎ、また、表現活動を行いたいと思っている潜在的ニーズを掘り起こし、活動の機会や情報提供などの手助け（協力）の場がある街を意味しています。

８（仮称）多摩市文化芸術将来ビジョン2035の策定に参加した市民の声

コメント（委員より）

コメント（委員より）

●ワークショップ「文化芸術の将来像を一緒に考えませんか？」（詳細は⇒）

ＱＲコード

日時：令和５年２月１８日㈯午後２時～４時

場所：パルテノン多摩会議室３・４

グループ討論内容（抜粋）

〇レベルの高い、一流のアーティストと呼ぶ

〇子どもが文化芸術に触れる機会、知る機会が必要

〇経験・体験の場が必要

〇必要な人に届く情報発信（マッチング・ネットワークも含めた）が必要

●アンケート（詳細は・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・⇒）

ＱＲコード

実施期間：令和５年１月20日㈮～２月20日㈪

回答数：１９４人（内 ＷＥＢ回答１７９名／紙アンケート回答１５名）

回答一部抜粋

〇文化芸術への関わり方や触れ方を自然と教わることのできる環境があること

〇ゼロ歳から参加できるイベントのバリエーションが必要

〇文化芸術活動を行っている人や団体が活動しやすい条件や環境を整えること

〇文化芸術への関わり方や触れ方を自然と教わることのできる環境がある（ことが必要）

〇保護者だけでなく地域全体での文化芸術の居場所的、自己実現としての役割の必要性の理解（が必要）

〇文化芸術というと「お金がかかる」という意識が先行するので、もっと気軽にふつうに触れるチャンスが大切

（裏表紙）

令和５年〇月
多摩市くらしと文化部　文化・生涯学習推進課
住所　多摩市関戸６－１２－１
電話　042-338-6882
FAX　042-371-3711